

Title	『坊ちゃん』教科書掲載部の検討
Author(s)	坂本, 千恵
Citation	国語論集, 12: 162-171
Issue Date	2015-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7732
Rights	

『坊っちゃん』教科書掲載部の検討

坂本 千恵

一 はじめに

夏目漱石『坊っちゃん』は現在、計四社(教育出版、東京書籍、学校図書、光村図書)の中学校の教科書において、読書教材として掲載されている。また、平成二十六年に行われた全国学力学習状況調査にも、『坊っちゃん』の一部が読解問題として掲載された。

読書教材として掲載されている『坊っちゃん』であるが、その実態は全十一章あるうち第一章のみの掲載となっている。読書教材という限られた授業時数の中で、第一章のみを通読することによって、果たして学習者は『坊っちゃん』が持つ作品本来の魅力を実感できるのかというところに、稿者の問題意識がある。教科書に掲載するテキストの在り方という観点から稿者の試行を中心に、夏目漱石『坊っちゃん』の教材としての可能性について考察していく。

二 教科書掲載部の検討

講義「国語の学び」において、北海道教育大学教育学部釧路校国語グループの一年生十四名を四グループに分け、それぞれ異なるテキストを使ってブレインストーミングを行った。その際、おおよそ四十五分間の個人思考の後、四十五分間のグループ討議をするという流れで

行った。ここではそのブレインストーミングで出た意見をまとめる。なおブレインストーミングではそれぞれのテキストの違いが考察にどのような違いを生じさせるのかを判断するため、考察の進め方や意見の分類の仕方等を全て各グループに委ねた。よって、ここでは学生の分類・考察を尊重し、そのまま掲載する。
テキストは以下の四通りである。

- ① 教育出版に掲載されている『坊っちゃん』第一章及び教科書に掲載されている『坊っちゃん』の解説
- ② 漱石全集『坊っちゃん』第一章
- ③ 漱石全集『坊っちゃん』第二章
- ④ 「10分で読む」要約「夏目漱石」(『文豪ナビ』)の『坊っちゃん』

また、グループのメンバーの振り分けの基準は以下の通りである。

- A : 『坊っちゃん』を全く読んだことがない人
- B : 『坊っちゃん』を読んだことがない、又は第一章のみ読んだことがある人
- C : 『坊っちゃん』を読んだことがない、又は全文の概要を知っている人
- D : 『坊っちゃん』を読んだことがある人

これらのグループに対して、それぞれ以下のようにテキストを配布し、ブレインストーミングに取り組ませた。

A…① B…②、③ C…④ D…②、④

Aグループでは、これまで『坊っちゃん』を読んだことのない人が教材からどのようなことを読みとることができているのかを検討した。そのため、実際に中学校で扱われる教材をテキストとしてそのまま配布した。

Bグループでは第一章のみではなく、第二章まで読み進めることよつて、第一章のみを読んだ場合と比較した際に、考察にどのような違いが見られるのかを検討した。そのため、漱石全集に掲載されている『坊っちゃん』第一章及び第二章をテキストとして配布した。なお、第二章は教材化されておらず、テキストが漱石全集に掲載されているものしかなかったため、表記の異同が考察に影響しないよう、どちらも漱石全集のテキストを用いた。

Cグループでは、全文の概要をつかむことが、正しい内容理解につながるかを検討した。そのため、『坊っちゃん』の要約のみをテキストとして用いた。

Dグループでは、全文を通した考察が、部分的なテキストで行う他のグループの考察とどのような違いが見られるのかを検討した。最低限おさえておくべき第一章と、全文を想起するための補助資料として要約を、テキストとして配布した。

二—I 各グループの考察の整理

各グループの考察を整理する。表現稚拙な部分や表記の誤り等が

見られるが、できる限り学生の記述のまま列挙する。

Aグループ

〈清と俺〉

○清つて何者？

・清は坊っちゃんに何を期待していたのか(本当に家なのか?)

・清は主人公にとつて親代わりの存在?

・清が主人公をかわいがる本当の目的とは?

・どうして清はそんなにも主人公を褒めるのか?

・なぜ清は主人公にそこまで期待するのか?

○俺にとつての清 好きなのか?

・主人公にとつて清の存在はどのようなもの?

・俺が清を嫌いにならなかったのは、三円をくれたこと?

・俺の清に対してのイメージはプラス? マイナス?

・俺は清が自分のことが好きなのを知っていた

↓ どういう「好き」?

・なんだか大変小さく見えた

↓ 涙でぼやけた? 清の弱々しさが伝わってくる

・俺↓清へ、気の毒、気味が悪い、褒めてくれる

始め: マイナス。「気味悪い」

最後: プラス。別れ、涙。

〈両親と俺〉

○関係性の矛盾

・親にバカにされる

・「俺」は両親にけなされるほどの行動だったのか(母が死ぬ二、三

日前の行動など)

・なぜ俺はおやじに対して柔順なのか

○その他

・くやしかった

↓母の死に対する悲しみ？兄に対する怒り？

根拠がない＝無鉄砲

〈文章表現〉

・俺にとつての価値物へ言葉へお金

・「じき帰る」↓「もうお別れになるかもしれません」

・清が初めて現実的な発言

・親譲りの無鉄砲↓表現の反復

・無鉄砲が損を生んでいるとわかっているながら、改めようとし
ないのか

・父「二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか」なぜ

そのような言葉を？

・飛車を肩間へたたきつけた

↓眉間が割れて、少々血が出た

・「もうお別れになるかもしれません」、なんだか大変小さく見
えた

↓解釈の仕方は？

・自分の力で俺を製造して

↓面白い。清が主人公の人物像を勝手につくりあげている。

・周りから批判されても、納得をする

↓ろくな者になつていないと認める

・周りの話しは聞かない、だめと言われすぎて何がだめなのか
かわらない

・主人公は負けず嫌い？

・坊っちゃんに負けず嫌い、短気、いたずら好き

・命より大事なくりとは？

・命より大事なくりだ

・いっつらの皮

・ぎゅうぎゅう

Bグループ

〈表現〉

・尻を持ち込まれたこともある

・何だか大変小さく

↓さみしそうだつたということを表している。年をとつたとか？

・北向きの

↓良いように扱ってもらえてない？

・越後、箱根

↓四国はそれほど遠い

・六百円で三年間学校に行ける

・甥は清をどう思っていたのか

・三円とはどれくらいか

・なんで命より大事？

〈家族〉

・仲良くないけど将棋はさす

・嫌いそうだけどもたまに認めている

〈清〉

・今となつては帰せない

↓清の死

・清↓婆さん

・清が必死

・清をばかだとあざけりながらも信頼していたのか？

・坊っちゃんが清にひいきされたこととおやちや兄に怒られたり、
ケンカしたりしないように気遣いつつ可愛がっている。

〈無鉄砲〉

・親譲りの無鉄砲

- ・無鉄砲を言い訳にしている
- ・親のどの部分が無鉄砲なのか？
- ・二、三日前、台所で宙返り

〈坊っちゃん〉

- ・公平なやり方が好き、不公平はだめ。若干律儀、まじめ。
- ・自信がある
- ・上から目線
- ・清との夢
- ↓坊っちゃんにとつても清は大きい存在？
- ・負けず嫌い(あがれ↓上がりたくない)
- ・やな女(反抗的)
- ・清への思い入れ？
- ・似た者に親近感
- ・大変小さく見えた さびしそう？

〈学校のこと〉

- ・年が年中赤いシャツを着るんだそうだ
 - ・先生方に悪口に近い名前をつけている。ひねくれている。
- 〈分らないこと〉

- ・清と俺の今後
- ・親の職業
- ・栗の木について
- ・清の今後
- ・学校での今後
- ・清の年齢

〔Cグループ〕

〈坊っちゃんの性格〉

- プライドが高い

・坊っちゃん⇨主人公

↓一人称は「おれ」

・謝罪しなければ辞職して帰っていた

↓なぜ？ 弱くない？

・プライドが高い

・校長の説明(狸)

↓あまり敬意を表していない

・清に対して「おれは御世辞は嫌いだ」

↓頑固、気が強い

・堀田⇨山嵐、教頭⇨赤シャツ、吉川⇨野だいこ

↓皮肉さ、少し悪意

○教師として：

・「憐れな奴等だ」二厄介な奴等だ」

↓どこまで意を込めた台詞なのか

・生徒からのいたずら

↓坊っちゃんと生徒は仲が悪かった。

・主人公の生徒に対するいらだちか？無鉄砲さか？

・なぜ先生万歳？ 二、三人皮肉

○その他

・坊っちゃん：少し仲間思いな面を見せる

・そんな乱暴をすると学校の体面に関わる

・なぜ卵で仕返し？

・なぜ生徒、教師に対して上から目線？バカにしている

・無鉄砲の表れ

・清の言っていた性格の表れ

・一人(主人公の視点)のみ

・自分の性格をそうは思っていない

・清⇨婆？ 清≠婆？

- ・山嵐が辞表を出した理由とは？
- ・「野だいこ」を「野だ」にしているわけは？
- ・渾名をつけることで何が変わるのか
- ・「うらなり」とは誰か？
- ・なぜケンカをさせたのか？「東京から赴任した生意気なる某」とは？
- ・「ぞなもし」から、四国のどこなのか分析できるか？
- ・「親譲りの無鉄砲」↓どこからわかる？
- ・「ボカボカ」と拳骨を食わした「は、なぜ「ボカボカ」なのか
- ・赤シャツ：表面上は良い人だが、裏で悪知恵の働く策士
- ・坊っちゃん性格↓クール
- ・「山嵐は頑固なものだ」↓神経質
- ・坊っちゃん、山嵐↓ケンカ強い
- ・自分の考え、意見が強い(会ってないのに)
- ・主人公の姿を最後まで読まないといけない
- ・主人公の赤シャツに対する不満となる
- ↓場面が描かれていない
- ・世間は大部分静かになった
- ・ターナーとは？
- ・ああ愉快↓田舎の人たちの反応を逆にからかっている
- ・なぜ即席に返事をしたのか
- ↓単に仕事が欲しかっただけでない？
- ・裏では裏切っているのに、どうして俸給上げるといふ気分が上がるような期待させるようなことを言ったのか？
- ・なぜ山嵐とこの不浄の地？
- ・赤シャツ、野だいこにとっておれはなぜ邪魔だったのか？
- ・なぜ生徒たちはおれをいじめるのか？

- ・おやじはそれだけでおれのことを勘当するのか？
- ・下女が泣きながら謝ることでどうして怒りが解けた？
- ・フランネルの襟衣：それが赤シャツだから人を馬鹿にしている。
- なぜ？

Dグループ

- ① 坊っちゃんとは？(客観的に見た)
- ② プライドが高い、上から目線
- ③ 不器用だが真っ直ぐ
- ④ 清が坊っちゃんを大切にしていた理由
- ⑤ ①かなりの変わり者だからこそ、将来大物になるのでは…という期待があったから。
- ⑥ 純粋な愛情
- ⑦ ③「坊っちゃん」を主君として敬愛していたから
- ⑧ (表現)
- ・「清はなんといつても」
- ・「分からんでも困らない。」なぜ？性格がでてる？
- ・「失策」よくないことが…
- ・「どうせ嫌な」物理や嫌でなかった？嫌だった？どちらともとれそう
- ・目線が上、仲の悪さ強調
- ・「自分丈得をする」最上級、それなのにエピソードや理由が少ない
- ・「仲が良くなかった」今さら
- ・「今となつては」意図あり
- ・「母が病気で」先に言ってしまう
- ・「乱暴で」 反復、強調

・「慥か」悪気がなさそうな感じ
・「大事な栗」 大事な割に理由が：
〈坊っちゃん・清〉

- ・清はなぜそこまでして「おれ」をかばったのか？ 愛？
- ・親も無鉄砲、親父も無鉄砲→二階位
- ・親譲りの無鉄砲を使いたがる
- ・プライドが高い、度胸がある
- ・損ばかりしているが、真っ直ぐなのは良いこと
- ・気違い？
- ・清はこの頃から坊っちゃんのことを考えていた
- ・清がなぜ坊っちゃんが出世すると思ったのか何となくわかった。
- ・なんやかんやで坊っちゃんも清の事が大事
- ・清「あなたは御可哀想だ、不仕合わせだ」なぜ？本人は感じていないのに…
- ↓父が兄ばかり可愛がるから？
- ・兄には親譲りの無鉄砲がないようだ
- ・同時はこういうガキ大将的な子がいて当たり前ではなかったのか？

- ・無鉄砲＝飛び降り、指切り
- ↓ここでも無鉄砲とは？
- ・「全く愛に溺れて居たに違いない」 清↓おれ？
- ・清が「おれ」は家を買おうと思ひ込んでいる理由は何か？
- ・なぜ「おれ」の父は「おれ」を駄目だと言ったのか
- ・「母が死んでから」 母の死が基準？
- ・清の言葉に影響されやすい
- ・「田舎へ行く」 「第一方向」 東京人なのに土地勘はそこそこある

〈山嵐・赤シャツ〉

・好物の意味？
・「山嵐は君赤シャツはく実に好物だと云った」 実際はどうだったのか？

- ・フランネルのシャツの表す赤シャツへの「おれ」の泰一印象は？
- ・山嵐は『坊っちゃん』の登場人物の中でも数少ない理解者？の一人
- ・山嵐が好き。生徒に一番人気があるのもうなずける
- ・山嵐もヤバイやつ

二―II 各グループの考察から見えること

各グループの考察の傾向は以下の通りである。

Aグループは、テキストの中から重要な部分に着目することはできているが、その点についての考察に疑問符がつけられていることが多い。また、『坊っちゃん』がこのテキストで完結したものであると誤認していたが、それは第一章の終末部分が原因の一つとして挙げられると思われる。

Bグループは、どのグループよりも情報量が多く、原文に触れている分、それぞれの考察の根拠に広がりが出て、より明確化されている。

また、第二章が四国に渡って数日間の話であり、これから始まる四国での教員生活の導入的な内容となっていることから、今後の展開を視野に入れた考察・疑問も見られた。なお、文章量の関係上、グループ討議の時間に入っても個人思考が継続されている様子が見られた。

Cグループでは、全章を要約されたテキストを使用している分、考察や疑問も様々な観点からされている。しかし、要約であるため、それぞれの記述についての根拠がほとんど省略されており、十分に考察を深めることができなかったものも多い。また、清と秋野の婆さんなど、登場人物についても混同しやすく、全体的に内容をとらえることにはで

きても、考察を深めるには至らなかつた。

Dグループは、Cグループと異なり、これまで『坊っちゃん』を読んだことのあるメンバーで構成されていたことから、テキストと自分の既存の知識を生かした考察ができていた。特にその傾向は人物像の考察に見られる。また、「母が死んでから」母の死が基準? という考察については、作品の全体像をとらえているからこそ想定できたものであり、母を失い、清という人物の存在がより大きくなったことをおさえた考察であると言える。

四グループを比較すると、まず「おれ」の人物像では、Aグループ以外は「上から目線」というキーワードが入っていることがわかつた。このような人を見下すような性格については、作品を通して見られる「おれ」の性格ではあるが、第一章にはそのように読み取れる記述は見られない。これは、第一章が主人公の人物像をとらえるには不十分であるということの意味する。

また、要約のテキストを用いたCグループでは、付箋の量は最も多かつたが、考察の浅さが目立つた。例えば、清に対して「おれは御世辞は嫌いだ」という「おれ」の性格を「頑固、気が強い」と考察している点は、「おれ」の「真つ直ぐで良い御気性」が反映されていない考察となつている。また、四国に行くことを即席に返事をした件から、「親譲りの無鉄砲」を連想することができていない。特に、他のグループとは異なり、第一章全文に目を通していないこともあつて、「おれ」と清との関係に関する考察がほとんど見られなかつた。これは、作品の特徴の一つである「伏線・対応部分の多さ」によるものだと考えられる。『坊っちゃん』では、作品全体を通して伏線・対応部分が多く見られるが、それらは相互に補充し合つて初めて有用性を持つものであるため、要約になつてどちらかが削られてしまうと読解に支障をきたすこととなる。よつて、要約だけではテキストとして相応しくないということがわかる。

一方、要約が渡されていないBグループについては、第一、第二章の

全文を配布しているため、作品の全体像をとらえることはできないが、本文からわかることとわからないことが明確化し、他のグループと比べて考察の量は少なくとも一つ一つの考察にしっかりと根拠が見られる。

これらのことから、今回のブレインストーミングの傾向についてまとめると、以下の四点が結論として挙げられる。

- ・要約はテキストとして適さない。
- ・第一章をしつかり読み込んでいなければ、その後の展開部を読んでも内容を理解することが難しい。
- ・第一章は導入部としてある意味完結しているため、第一章のみを読み込んでいても、その後の展開を想像することや、作品の全体像を把握することは困難である。
- ・四十五分間の読解では十分に内容を深めることは難しい。

三 結論

『坊っちゃん』の魅力は細やかで多様な人物設定と、作品を通して伏線・対応の多さにある。よつて、教材化の際には作品の魅力を理解することができるよう、全編を扱うことが理想である。しかし、配当時間等の関係で、それが難しいのが実状であろう。

平岡敏夫は『坊っちゃんの世界』において、次のように述べている。

「坊っちゃん」における基本的な対立構造はすでに「一」における兄との対立によつて示されているわけであり、清の愛情やその風邪をふくめて「二」は「坊っちゃん」という作品全体の縮約的な位置を占めている。

これは教科書の掲載部分を検討する際に重要となる点であると考ええる。確かに、『坊っちゃん』の主題が「おれ」と清を中心とした人間関係とするならば、平岡敏夫の論は適切であろう。しかし、本作品の主題は、「主人公の成長に大きな影響を与えた清とその出来事」であると稿者は考える。そこに必要なのは四国での体験であり、第一章だけでは作品全体の縮約的な位置を占めているとは言いがたいことから、第一章のみの掲載は不適切であると考える。

また、第一章のみのテキストから読み取れる主人公の人物像と、第二章以降を含めたテキストから読み取れる主人公の人物像には違いがあること、あらずじでは作品の内容について十分な理解を得ることが難しいということ、前述した「教科書掲載部の検討」から明らかとなっている。加えて、第一章のみの掲載であると、赤シャツや野だいといった有名な登場人物は出てこない上に、伏線や対応を理解することができず、学習者は作品の魅力に気づくことができないままとなってしまう。そして、第一章の終末部の効果によって、章末の区切れがはつきりとしすぎているが故に、第二章以降の四国へ出立してからの「おれ」の様子を知ることができず、予想することはできない。このような点からも、第一章のみでは作品・教材としての価値を十分に保障することが難しいと言える。

「坊っちゃん」の教材化を考えた時、全編を掲載することができないのであれば、掲載部以降は学習者が自主的に読み進めることが求められるであろう。そのためには、作品の魅力を中心に伝えることが授業のねらいとなる。

そこで提案したいのが、教科書掲載部を第一章のみではなく、第二章まで拡大することである。第二章は「おれ」が四国に渡り、中学校の教師と出会うところまでの内容となっている。また、伏線・対応の一つである「親譲りの無鉄砲」に関しては、奮発して茶代

を払ったことで東京に戻りたくても戻れないという状況が当てはまる。そして何より、「此辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞った。」という、全編の結末とも言える伏線が張られているのである。このような点から、第二章まで読むことによつて初めて『坊っちゃん』の魅力に触れることができ、その後の読書活動を促すことにつながるのではないだろうか考える。

なお、第三章については、教員生活が始まってからの出来事の記述のみであつて、第一、二章と比較すると過去に関する記述が見られない。よつて、清の記述もない。また、登場人物も少なく、「おれ」に関する記述が多いことから、掲載箇所を拡大する際には第二章までにとどめることが適切であると考える。

では、このように設定した教材をどのように扱うことが適切なのだろうか。

はじめに述べたように、稿者は読書教材という限られた授業時間の中で、第一章のみを通読することに対して反対の立場であった。なぜなら、本作品は登場人物の心情を読みとる上でも、語句の理解を深める上でも、適切な教材であると考えていたからである。そして、読書教材として単に文面を追っていくだけでは、作品の魅力を知ることができないと考えていたからである。この段階では私論に過ぎなかったが、今回、全国学力学習状況調査において『坊っちゃん』が読解問題として出題されたことにより、至論へと導くことができる可能性を見出し、やはり本作品は読解教材として扱うことで、その教材価値をより高めることができると考えるようになった。

読解教材として扱うということは、その授業のねらいは文章の内容理解となり、文章中の記述から登場人物の心情や語句の意味を捉えることが学習活動の中心となる。そのねらいを達成することによつて、教材のねらいである、作品の魅力をより詳しく伝えること

も可能となる。

しかし、読解教材として『坊っちゃん』を扱うことで、より学習者の興味を引くこともできるという反面、読みを深めることによってはある意味学習者の中で『坊っちゃん』が完結し、全編を読むという意欲へとつながらない恐れもあるだろう。また、日常の読書経験の少ない学習者や、国語を苦手とする学習者にとっては、かえって全編を読むことから遠ざけてしまうことになるかもしれない。

このような点を視野に入れながら指導書を検討していくと、読書教材として扱うことの利点も見えてきた。それは、読書教材としてあえて作品の一部分を簡略的に扱うことにより、学習者が作品に関心を持つことができれば、日常の読書活動の中で全編を読むことにつながることもできるということである。

この点については、読書教材として扱う際のあらすじの是非についても同様のことが言える。確かに、あらすじを掲載することによって、おおまかにではあるが作品の全体像を捉えることができたり、作品に関心を持たせたりすることもできる。そこから全編を読むことにつながることも可能であろう。

しかし、簡略的に扱うことでかえって読むことに困難さを感じたり、あらすじを読むことによって、そのあらすじが作品そのものであると誤認し、全文通読から遠ざかったりしてしまう恐れもある。

このように、本作品は読解教材として扱うにしても、読書教材として扱うにしても、それぞれの利点・欠点が見られるのである。これは換言すると、教材としてどのように扱うかは学習者の実態等によって左右されるが、どちらとして扱ったとしても、十分に作品の魅力を発揮することができるといえる教材であるということである。

よって、『夏目漱石』坊っちゃん』は、読書教材としても読解教材としても、その役割を果たすにふさわしい、魅力ある作品である。そして、その作品の魅力を伝えるためには、第二章までを掲載するこ

とが適当であるということを、本稿の結論とする。

参考文献

- ・佐藤隆信『文豪ナビ 夏目漱石』新潮文庫 二〇一二年六月 四七～五六頁
- ・夏目金之助『漱石全集 第二巻』岩波書店 一九九四年一月
- ・『新しい国語 2』東京書籍 二〇一二年二月
- ・『国語1』光村図書 二〇一二年二月
- ・『新編現代文』明治書院 一九八七年一月
- ・『新編現代文 指導資料』明治書院 一九八七年一月
- ・『中学校国語2』学校図書 二〇一二年二月
- ・『伝え合う言葉 中学国語2』教育出版 二〇一二年二月
- ・『伝え合う言葉 中学国語2 教師用指導書 教材研究編 上』教育出版 二〇一二年二月
- ・平成26年度全国学力・学習状況調査の調査問題について 中学校 国語A 国立教育政策研究所 ホームページ
http://www.nier.go.jp/14chousa/pdf/14mondai_chuu_koku.go_a.pdf
- ・平成26年度全国学力・学習状況調査の解説資料について 中学校 国語A 国立教育政策研究所 ホームページ
http://www.nier.go.jp/14chousa/pdf/14kaisetsu_chuu_koku.go.pdf
- ・平成26年度 全国学力・学習状況調査 報告書【中学校／国語】 国立教育政策研究所 ホームページ

附 記

本稿は二〇一五年一月に北海道教育大学釧路校に提出した学士論文の一部である。

これまでの研究を振り返って感じるのは、積み重ねていくことの大切さである。四年間の積み重ねがなければ、本稿は完成し得なかったであろう。ただ、中には四年間という時間を以てしても、自身の力量不足と相まって、まだ考察の余地のあるものや、考察を断念したものも少なくない。しかし稿者は、この研究が今後教員となつて国語を教える際、教材研究を行う上で必要な力の礎を築いてくれたと信じている。どの読解教材や説明文教材であつても、一文一文、一語一語に真摯に向き合う姿勢を持ち続けたい。

本稿の作成にあたり、佐野比呂己先生には作品の関連資料や文献をご紹介いただいたり、本稿の構成についてもアドバイスをいただいたりと、多大なる御指導・御助言をいただいた。また、ゼミナル活動や研究発表の際には国語研究室の諸先生方、学生の皆さんに様々な助言をいただいた。

本稿を形にすることができたもの、佐野先生をはじめとする諸先生方の御指導、研究室の皆さんの存在あつてのことである。本稿の作成に携わってくださった全ての方々に感謝の意を表し、本稿の結びとしたい。

(さかもとちえ／北海道教育大学釧路校四年)